

『脳内麻薬』(中野信子著)を読む

<< 作成日時 : 2014/07/28 07:28 >>

2014 年 7 月 27 日



美人脳神経科医

この本の副題は「人間を支配する快楽物質 ドーパミンの正体」とある。新書版で200 頁に満たない小冊子であるが、中々に興味深い内容に満ちている。

今では人間を幸せな気分にする脳内麻薬物質ドーパミンの名は人口に膾炙するようになった。書店によるとこの本はよく売れているらしく、増刷が追い付かないほどらしい。二週間ほどしてやっと手元に届いた。

著者が斯界きっての美人脳神経科医ということも話題になっているようであるが、頭の方も飛び切り良い女性とみえ、巻末の著者略歴によると、「世界で上位2%の IQ 所有者のみが入会できる MENSA の会員」であるとのことである。

本の内容とは直接関係ないといえはその通りであるが、そういうことを承知の上で本を読み進めれば、ドーパミンの分泌が進み本の内容もよく頭に入る気がするのである。

キューブラ・ロス『死ぬ瞬間』

私がこの本を手にすることに決めたのは、ある書物を読んだことで「脳内快楽物質ドーパミン」に興味を持ったからである。

その書物はアメリカの心理学者キューブラ・ロスの『死ぬ瞬間』である。

この題名で何冊か出たようであるが、私が読んだのは最初の著作であったと記憶している。この書物もよく知られているからご存知の方も多いと思われるが、内容は、死にかけた人、あるいは死を宣告されて生き返った人にインタビューを試み、臨死体験を語ってもらい、その内容を記録したものである。

冥途の入り口に立った人、一端冥途に踏み込みまた戻ってきた人の語る臨死体験は驚きに満ちていて感動的であるが、その詳しい内容について知りたい人は直接本を読んでもらうしかない。

怪我による出血は快楽

私とその本で興味を持ったのは、人は臨終に際して(病気であれ怪我であれ)痛みや苦痛を感じないであの世に旅立つというくだりである。

その理由は、死ぬほどまでの痛みに対して脳内快楽物質であるドーパミンが大量に分泌され、痛みを軽減するどころか快感を与え安らかな死をもたらすと書いてあったからである。

私はそう記憶していたが、痛みを和らげるのはドーパミンではなく、オピオイド(モルヒネに相当)という痛みを和らげる物質であることをこの本で知った。

特にこのオピオイドが大量に分泌されるのは怪我による出血で、出血で死を迎える時はとても安らかにあの世に行けるらしい。怪我による出血で死を迎えた(ようにした)人がいちようにそのように答えたとのことである。

ドーパミンとアルコール依存症

私は真剣による剣術修行をしており、時代小説などをたくさん読むが、多くの場合、斬られて死んだ人が苦痛に顔を歪めて絶命しているとあるのは、もしかしたら間違いなのではないかと思ったりするのである。

友人や弟子たちに対しても、「斬られて死ぬ」というのは一番気持ちのいい楽な死に方なのだ」と吹聴して周っている。

少し回りくどくなってしまったが、脳内快楽物質と出血死の関係について、何らかの言及があるのではないかという期待があったことが一つ。もう一つは、アルコールとドーパミンの関係についてである。

前者については残念なことに全く言及がなかったが、後者については若干の記述がなされていた。酒を飲むと気分が高揚し気持ちよくなるのはドーパミンの分泌が多くなるというのであるが、その心地よさを大脳中枢部にある海馬が記憶していて、また酒を飲む気持ちを起こさせる。その集積がアルコール依存症につながると著者は解説している。

つまりドーパミンの分泌がアルコール依存症を招くという論法である。

医師たちは実態を知らない

しかし、毎日相当量の酒を飲んでも深刻な依存症にならない人もいれば、相当量以下でも依存症になってしまう人もいる。このことについては本書でも触れているが、何故そうした違いが生まれるのかということについては、「体質」で片付けられている。

しかし、精神科医が一様に述べる基準からすると、一日日本酒二合、ウイスキーダブル二杯、ビール大瓶二本（もしかしたら基準はもっと厳しいかもしれない）を三十年間飲み続けると確実にアルコール依存症になる、ということらしい。

そうした基準がほとんど意味をなさないことは世の酒飲みたちが実感で知っている。

医者出来るだけ厳しい基準を設ける。そうしなければ責任を問われかねないからである。ということは、医師たちがアルコール摂取の実態を把握しておらず、研究も進んでいないことを明らかにしているに等しい。

気分が良いと悪酔いしない

私が同書に期待したのは、アルコールと精神の関係であり、ドーパミンの分泌が快感・快楽現象の創造的部分にどう作用しているのかを知りたかったからなのである。

ヤケ酒をしたり噛み合わない相手と議論になったりしたとき、酔いがすぐに回って悪酔いしてしまう。

しかし、楽しい酒を飲むといくら飲んでも悪酔いしない。いつも飲む量を遥かに超えても酔わないのである。

気分が良いと、何らかの酵素が関与して、肝臓がアセトアルデヒド（悪酔いの原

因物質)を瞬く間に分解してしまうなどと考えたこともあるが、実際は脳にそのコントロール作用があるのではないかと私は思っている。

血中に出回ったアルコールの濃度は変わらないはずである。であるのに、気分が高揚していると何故脳で悪酔いの成分がブロックされるのか、ドーパミンあるいは快楽の抑制物質がどういう作用で関わっているのか、そのヒントを得たかった。

創造的意欲を刺激するアルコール

しかし精神状態にアルコールがどういう作用をもたらすのか、ということについてはその詳細はまだ分かっていないのではないかとと思われる。この本からそのヒントを得られることはない。

もう一つ、もっと重要なことは、アルコールを摂取すればするほど気分が高揚し、創造的思考を誘起するという現実である。

泥酔に匹敵するアルコールを摂取すればするほど、創造の意欲が刺激されるという脳の構造について先生方から明確な説明をしていただきたいものである。

かつて中国の詩人杜甫は「酒一斗詩百篇」と同時代の詩人李白について詩で述べた。中国の一斗は日本の一升程度であるが、それにしても飲めば飲むほど湧き上がるようにして詩想が生まれてくるという脳の構造を、天才の一語で済ますわけにはいかない。

大脳に流れ込んでくる大量のアルコールが、明らかに創造の意欲を刺激しているのである。普通は酒を飲みすぎると考えるのも億劫になり意識が混濁してくるはずなのに、李白の場合は飲めば飲むほど大脳はクリアとなって創造的意識になるらしい。

アルコール性の肝硬変で死亡した若山牧水も飲むほどに詩想が湧きだすタイプ

の歌人であった。そういうタイプの科学者や芸術家は少なくないのではないか？

本来酩酊を引き起こすはずの大量のアルコールが、何故前頭葉の知的創造的分野を刺激し励起させるのか、そのことを著者の中野女史に解明してもらいたいと私は切に願っている。

幻冬舎(2014 年 1 月初版発行)

2014 年 8 月 14 日

つい読み易い本に手が伸びる

私はこれまで一か月に 14、5冊の本を読んできた。本好きの人にとっては決して多い方ではない。

日中は飲食関係の仕事をしているので、じっくり読むことができるのは休日しかない。休日でも読書三昧で過ごしているわけではないので、結構慌ただしく読んでいくことになる。

ほとんどは図書館から借りた本を読むが、剣術関係の本は買って読むことが多い。図書館からは好きなミステリーや刑事ものを常に一、二冊必ず借りていた。

読んでいるときは面白く夢中になって次々手に取るが、読んでしまうと読後の充足感というものが薄く、時間の損失感を味わうことが多い。

むろんそうしたことはずっと感じていたことではあるが、重い本に取り掛かることに気おくれを感じ、つい読み易い本を先に手に取ってしまうのである。

日本人である自分を考える

しかしこのところ感じることもあり、自分がなぜ今ここに居るのか、日本人として生まれたことにもう少し気を使ってみる必要があるのではないか、と深刻に考えるようになった。

残り少ない人生である。徹底して自分を極めてみたいという思いが強い。

そのためには先人が残してくれた遺産ともいべき古典作品を、集中して読むべ

きであると感じるようになったのである。

もともと、その自覚は数年前から抱いていて、古事記から始め、日本書紀、平家物語、保元平治物語、今昔物語、太平記等々、日本歴史に関わる書物を読み進み(軍記物が中心)、信長公記で止まっている。今年是一年がかりで南総里見八犬伝を全巻読了し、気を良くしているところなのである。

古事記は我が祖先

そうして再び初志に戻って古事記から読み始めた。今は日本書紀(小学館 日本古典文学全集)の再読に取り掛かっているところである。

そこで重要なのは、これまでのように、ミステリーや刑事ものあるいは現代(時代)小説と一緒に借りてこないように決意したことである。

どんなに気が重くても、日本書紀や源氏物語や甲陽軍鑑とかの古典しか手元に置かないようにしたのである。決意は気分を新たにする。

固い決意で重い本を机の前に置き頁を開くと、それなりに頁は先へ先へと繰られてゆく。

先人の意志と言葉と時代との関わりが脳裏に焼き付いていく。

そうした先人の存在、すなわち行為と戦いと言葉があって、今の私が存在するのである。

何万年何千年以来途切れることなく種が続いていて現在の私に繋がっていることを思うと、古事記の世界も現在の私と無縁ではないことに思い当たる。

そのことを思うと生きていることが実にうれしくなるのである。

さあ、気を取り直して日本書紀の時代に分け入っていこう！

映画『大いなる沈黙へ』を観る

<< 作成日時 : 2014/08/23 18:24 >>

2014 年 8 月 17 日



オールド映画ファン待望の作品

いつもの人からこの映画の招待券を頂く。

この映画は始まる前から話題が沸騰しており、興行成績を押し上げていると聞く。

撮影対象、制作のいきさつからして特異であり、照明、音楽、ナレーションを一切用いず、自然の音、自然の光だけで全篇撮影されたということである。

映画創世記の前衛映画ならともかく、派手な CG 映画が幅を利かす現代の映画界では、特異という言葉が十分あてはまる。

そうした話題の制作方法は、派手な CG 映像と音楽に食傷気味のオールド映画ファンにとって、期待に眼を輝かせるに十分であり、若い映画好きの人たちにとっても興味を抱かざるを得ないはずである。



チケット売り切れ 長蛇の列

私もオールド映画フアンの一人であることを自認しており、招待券を頂いたことに大いに感謝しつつ、はやる心を抑えて、30分以上も前にホールに到着したのである。

この日のチケットはすでに売り切れていて、落胆の表情を浮かべて立ち去る人たちの後姿を眺めながら、招待券を手にした優越感に少しばかり感情を昂ぶらせてエレベーターでホールのある10階に到着すると、すでに前売り券を持つ人たちの長蛇の列ができていて下の9階までびっしりと並んでいる。

予想してたとはいえ、大盛況であり、こんなに客が並んだ岩波映画に私は久しく出会ったことがない。

高級リキュールの原産場所

話題の第一は、撮影対象となった場所であろう。

その場所とはフランス南東部の山間に位置するグランド・シャトルーズという何世紀も前から続く男性修道院である。

シャトルーズというと、若い頃バーテンをしていたことのある私にとっては懐かし

い名だ。フランス産高級リキュールの名である。たくさんの薬草から作られる黄色味を帯びた滋味深い独特の香りがするリキュールである。このリキュールを使った有名なカクテル(確かアラスカといった)もあったように記憶する。

この映画の舞台となる修道院がその原産地であるというのは意外な気がすると共に、懐かしさを憶えるのである。

修道院で度数の高いお酒が造られているのであるから、厳格な規律で知られる修道院とはいえ、単に薬としてだけではなく、アルコールとして飲酒することもあったに違いない。修行僧の束の間の息抜きとして用いられることが無かったわけではあるまい。

飲酒を禁じているはずの禅宗でも、般若湯などと称して酒を嗜んでいたというから、驚くには当たらないのであるが。

申し込みから 16 年後の許可

しかし、この修道院は戒律が厳格なことで知られ、何世紀もの間撮影はおろか、内部の生活の模様さえ知られることなく延々と同じ修行生活が続けられてきた。

この修道院にかねて興味を抱いてきたドイツ人の映画監督プイリップ・グレーニングが撮影申し込みをしたのが 1984 年であるが却下され、待ち続けた挙句承認の文書が届いたのはそれから 16 年後の 2000 年のことであったとのことである。

監督は修道院に 6 か月も泊まり込み、修道僧たちと同じ生活をしながら撮影を続けた。修道院側からの要請もあったのであろうが、音楽も、照明も、ナレーションも使わない映画というのは驚き以外の何ものでもない。

2 時間 46 分という長さも興味をそそられる要素であることは疑いえない。

さすがに年配客が多い。後ろの方で「あなたは何回バチカンに行ったの?」「まだ

二回だよ」「私は三回行ったわ」などという老カップルの声が聞こえてきたりするから、信者の方たちも多いと思われる。



字幕から映画は始まる

沈黙の中で静かに映画が始まる。

冒頭、無声映画のように聖書の言葉と思われる字幕が出る。

「主の前でおおかぜが起こり山を裂き 岩を砕いたが 主は おられなかった

風の後 地震が起こったが 主は おられなかった

地震の後 火が起こったが 主は おられなかった

火の後 静かなやさしい さざめきがあった」

作品の内容を暗示するものか、作者のメッセージが託された引用なのか予断を許さないが、ラストシーンでもこの言葉が字幕で表される。

シーンは続いてクローズアップされた雪が舞うようなシーンが数秒あり、続いて灰色の画面が同じく数秒間続く。もしかしたらバックに景色があるのかもしれない。

しかし、画面は振動するような灰色の景色にしか見えない。

客に対する映画の挑戦

続いて若い修道僧の横顔が大きく映し出される。

カメラが引くと、仕切りされた半畳ほどの小部屋に設けられた祈り台の前に膝間づいて、目の前の壁に向かって一心不乱に祈りを捧げる僧の全身像が映し出される。

唇の前で両手を組み、段差のある床に両膝を突いて祈り続ける。その映像は数分間も続く。

祈りを捧げる修行僧の手前に円筒形の薪ストーブがあり、山中の厳冬に耐えられる様が窺われる。そこは修行僧に与えられた個室と思われるが、おそらく四畳半ほどの広さであろう。僧はフード付きの純白の衣装を着ている。

長い祈りの合間に修道院を俯瞰した位置から周囲の山間の風景が遠景で映し出される。山も大地も木々も雪で真っ白であり、振り続ける雪は風にあおられて横殴りに降っている。

冒頭からまだ 10 分も経っていないが、私の前の席の客の半分は頭を垂れており、私の斜め前の年配の女性客などは軽い寝息を立てて熟睡している。客に対する映画の挑戦の始まりである。

寝息を立てて熟睡する客

冒頭に出てくるその若い僧が主人公といったものではない。僧房の一つの光景であるにすぎないが、もちろん監督が冒頭に置く以上、位置づける何らかの理由はあるのであろう。

このドキュメンタリーの特徴の一つは、朝昼晩、春夏秋冬といった時系列がないことである。つまり、映画に物語というものがないのだ。

僧院の内部の細かいエピソード、日々繰り返される日常の出来事が、何の連携もなく唐突と言ってもよい仕方で提出される。

観客の意識の弛緩はますます進み、目をつぶって頭を垂れる人たちの数が増える。

もちろん、次にどんな映像があり、どんなどんでん返しがあるかもしれないと思い（どんでん返しなどあるはずもないのであるが）、頭を垂れず閉じそうになる眼を無理やりこじ開けて画面に見入る人たちの方が多いと思う。

会話が禁じられた僧院

眠気を誘うということでは他のどんな映画も太刀打ちは出来そうもない。

音といえば、僧たちが歩くときの衣擦れの音、書物を繰る音、聖書の文句を抑揚を付けて唱和する音、猫たちに餌をやるときの声、そして、台所で野菜を刻む包丁の音がする位である。

祈り、読書、睡眠、食事の他は音がない。僧院内では会話が禁じられているということである（ナレーションがないのでパンフの解説で補足）。

ただし、一日一度の屋外での散歩のときは会話が許される。そのとき彼らが話す内容は他愛無いものであり、教義の問答といった小難しいことは議論しない。彼らは、一日のおそらく小一時間に満たないその時間が、食事と同様何よりも心待ちにしている瞬間であるかもしれない。

独房の囚人たちを思い浮かべないこともないが、彼らは自ら志願して勝ちえた自由の空間であり、神に仕える最も近い場であり、意識としては、囚われ閉塞されているという感覚はまったくないであろう。

自分たちこそ選ばれた神の僕であるという意識が強いのだと思われる。

修行僧たちの迷いのない顔

前後の流れに関わらず、唐突に修行僧たちの正面からの顔が幾度もクローズアップで映し出されるが、その顔には迷いの色はまったく見られない。

じっとカメラを見詰める顔にブレや迷いはなく、眼は遠くを見つめるように深く澄んでいる。表情を変えない人もいれば、薄く笑みを浮かべている人もいる。ときおり挿入されるだけであるが、おそらく全員の顔が映し出されているはずである。

老人もいれば黒人もいる。明らかに死に瀕していると思われる病床の老人も映し出されている。

その中で視力を失った老修行僧がカメラに向かって語るシーンがある。彼はいう。

「私が視力を失ったのは、神の思し召しである。私に試練を賜り、もっと修行の成果を高めようと神が視力を無くしたもうたのである。

人間はいつか死ぬ。誰にも死は訪れるものであるから怖れることはない。それどころか、早く死ねばそれだけ早く父の御側に行けるわけであるから、むしろ死は望むところである」

といったことを話す。



バリカンで髪の毛を丸刈りにする

何世紀にも亘って同じように続いてきた彼らの生活が、世俗の私たちの感覚で計り知れないものであることは確かであるが、野外に出ての散歩と歓談の時、食事、薪割り、猫に餌を与えるとき、冬山に登って靴のまま滑り降りて気分を発散する瞬間は、やはり気晴らしの瞬間であることは疑い得ない。

また散髪専門の部屋で、二列並んだ席に座り、頭をバリカンで丸刈りにするシーンがあるが、これも(何週間に一度なのかもしれないが)大いに気晴らしになることであろう。頭を刈った後の晴れ晴れとした表情がそのことを物語っている。

腕時計をはめた修行僧

しかもバリカンは上からコードで繋がった電動であり、紐を引いて鐘楼の鐘を打ち鳴らす部屋の壁に掛けてある柱時計も、振り子が見えないから電動なのである。

読書台に置かれた照明も電灯であるから、彼らが必ずしも現代文明に背を向けた集団ではなく、文明の恩恵を取り入れていることが知れる。

水の一滴で指先を濡らし、カーテン用の布で手を拭いて食堂に向かう時、一人だけ腕時計を嵌めた修行僧の姿をカメラは意図的に捉えていた。

水は、澤の流れからホースで引いて使っているところが撮影されている。

脈絡のない映像の合間に、聖書からの引用と思われる言葉がふいに字幕で差し出される。

「一切を退けて私に従わぬ者は弟子になれぬ」とか

「主よ あなたは私を誘惑し 私は身を委ねました」とか

「見よ 私は人になった お前が神にならなければ 不正を行ったことになる」。

缶カラー一個が唯一の私物

こうした言葉は修行僧たちにとって日常の在りようそのものなのである。

缶カラー一つだけが自分の持ち物であるそうした禁欲生活は、むろん世俗とは無縁である。

その世界には戦争もなくおそらく殺人もない。出世欲、権力、世俗のありとあらゆる欲望とは無縁に暮らし、僧房で一生を終える彼らはただ一つ、神の意志によって御側に寄り添うことだけが目標なのである。

それが空しいとか無意味だとかと言う資格は誰にもない。

自分だけが幸せならそれで良いのか、という疑問もおそらく彼らにとっては無縁のものであろう。

仏教でも、禪宗はそうした傾向が強く、悟りを得て仏になることが唯一の目標なのである。

ただし、仏教には「山川草木これことごとく仏」という言葉があり、人間中心主義の中国以西の民とは考えが異なっている(現代の中国は最早西洋・中東の民以上に人間中心的である)。

唯一神教の民には他宗を受け入れない場合が多く、現代でも戦争や民族紛争の元となっている。

聖書引用の字幕が伝えること

欲望を断てば戦争も殺人もない。そうした世界の住人になるためには、ものすご

い意志と決意と実行力を必要とするのだ。ごく限られた一部の人間だけにそのことが許されている。

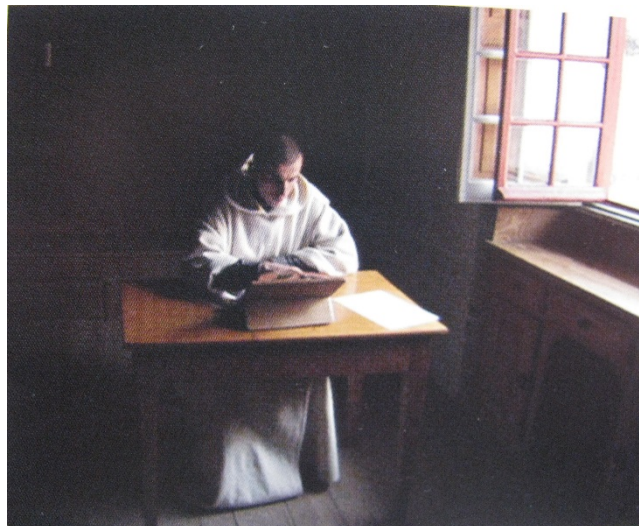
そうして最後に監督は、冒頭に挙げた旧約聖書の言葉を再び字幕で掲げるのである。

「大風が吹き、地震が起こり、火が噴いても神はそこに居なかった。只、火の後、静かなさざめきがあった」(要約)と。

このことの神学的哲学的意味については、映画を観る各人の判断に委ねられる。

映画がどういう主張をしようとしたのか、何を訴えかけようとしたのか、あまり深く考える必要はないと思う。

敢えて物語性を持たせず時系列を排して、グランド・シャトルーズ修道院の四季と日常を点描して見せた監督の意図こそがすべてなのである。





これからの映画に資する革命的作品

問題は監督の問い掛けの答えを探すことではない。この映画はこれからのドキュメンタリーだけでなく一般の映画創りに対しても示唆することが大である。革命的映画と言ってもよい。

照明なしの画面があんなにも美しく(フェルメールやレンブラントの画像と何とよく似通っていることであろう！)、余計な説明や情緒を逆撫でする音楽が排されることによって、あんなにも静謐で品のある映像が現出するということを、完膚なきまでに実現して見せたのだから。

最後の字幕と共に映画は終わり、客の睡眠時間も切断された。映画と客の戦いの終幕であるが、勝利を収めたのはどちらの側であったのだろうか？

最後に一言付け加えておきたいのだが、私はこの記事を書くに当たって、パンフに載せられた映画評論家や著名な作家の批評記事に一切眼を通さなかった。必要最小限の情報を、監督自身のコメント、字幕の転写から得た程度である。

もし類似した表現があったなら、たまたま意見が一致したに過ぎない。これから、映画評、書物評、演劇評を書くことになると思うが、それはすべて私自身が考えた表現であると受け取っていただきたい。

この映画は神田岩波ホールでのロードショウ上映を 22 日に終えて、23 日から有楽町の「ヒューマン・トラスト・シネマ有楽町」(03-6259-86089)で 29 日まで上映されるとのことである。

京ことば 源氏物語』全五十四帖隔月連続語り第三十一回

<< 作成日時 : 2014/08/30 23:10 >>

2014年8月23日



又しても先延ばしの記事

語りのあった日は10日であるから、すでに二週間が経ってしまったことになる。

その時の様子や感慨が生々しく感じられるのは(つまり旬の時期は)せいぜい一週間以内であるはずなのに、またしても大幅に旬の時期を外してしまった。

酷暑の真ただ中であり、夏とはこんなにも暑いものであったか、とことさらに寝苦しい夜を過ごしているうちに、急に涼しくなりあの暑さが嘘であったような今日この頃である。

さて言い訳は見苦しいが、ある程度の日数を経れば当初思っていたこととは違った思い付きやアイデアがひらめくことがある。この言葉に気を取り直して今

回の語りの内容を振り返ってみよう。

父源氏とは正反対の性格

今回は第三十三帖「藤裏葉（ふじのうらは）」の巻である。題名は例によって古歌から採られている。

物語の主人公はもはや光源氏ではなくその子息夕霧の中将（この巻の終わりでは中納言に昇進）である。

それどころか巻の中ほどで、源氏は出家への意思をほのめかしている。もはや本人自身の色恋沙汰とは縁を切った別の世界に物語は進もうとしている。

息子の夕霧の中将とは性格が異なることが強調されていて、息子は慎重で手堅く学問好きで生真面目な若者であるとされている。

父親光源氏（准太政天皇）の若かりし頃の大胆かつ奔放で恐れを知らない女色への耽溺とは正反対なのである。

若年の頃互いに惹かれ合っていた内大臣（源氏のライバルであり遊び友達）の娘雲居の雁のことが忘れられず、誰とも浮名を流すこともなく十代の後半に至っている。

とはいえ他の女に見向きもしなかったという訳ではない。側に仕える女房たちとはよろしくやっていたふうであり、源氏の腹心ともいうべき惟光（これみつ）の娘藤の典侍（ないしのすけ）を可愛がっており、作者は本文中で、雲居の雁と結婚したのちも藤の典侍を愛し続けるであろう、とわざわざコメントしているほどである。

出家の意思を示す源氏

特定の人だけを愛し続けるというのは今でいう朴念仁のことで、当時ではありえないことであつたに違いない。複数の女性を同時に愛することができるのがまともな男子であつた（貴族社会だけの通念？）。源氏の女性遍歴にしても、当時ではさほど眼を剥くようなことではなかったと思われる。

ただし、父天皇の愛妾と不義密通し子を成した（後に天皇位に就く冷泉帝）ことは許されることなく、忸怩たる思いは消えることなく心にわだかまり続けているはずである。

まだ三九歳という若さであり、天皇に次ぐ准太政天皇という官位に就き、政界の頂点にあって栄華を極めているのにも拘らず、出家の意思を抱くというところに源氏の内なる懺悔の心を聞くのである。

だがそれで物語が急に寂しいものになっていくとか、華やかな恋物語が無くなってしまうとかといったことはないであろう（源氏物語を通読していないので、この先どうなっていくか予想もできないのであるが）。まだ全帖の半分までの分量しかないのである。

これからどう展開してゆくか興味をそそられるのであり、王朝物語の天才作家紫式部の力量に期待大といったところなのである。

内大臣の野望

話の展開が先走ってしまったが、夕霧の中將と雲居の雁のことに話を戻したい。

雲居の雁の父親内大臣（後に太政大臣に昇進）は、かつて二人の仲を引き裂いた経緯があり、それなりに気を病んでいた折も折、中將に宮家からの結婚話

が持ち上がり、自分がそのまま我を張っていては中将を失ってしまうことになる
と思い決断する。娘との仲を復活させようという気になったのである。

なぜ二人の仲を裂いたかという、内大臣には野望があり、娘を東宮に娶せ
ようと画策したのである。

夕霧は時の権勢の頂点にある太政大臣の子息であり、決して見劣りがする相
手ではなく、それどころか望んでもみない良縁なのであるが、時期天皇を約束さ
れた東宮(皇太子)の妃ということになると話は別である。

しかし別の女性が東宮の妃に決まり野望は挫折する。



藤の花の色と香り

あの手この手を使って夕霧の中将を邸に招き、息子の頭の中将を巧く使って
やっとのことで娘雲居の雁との逢瀬を成し遂げさせるのである。

藤の花見ということで中将を招いたのであるが、春の花はどれもあつという間
に勝手に消えてしまうが、藤の花は順次に咲き続け、秋まで眼を楽しませてくれ
るということを内大臣が感慨深げに述べる件りがある。

藤の花は、(語り部の山下さんも解説で述べておられたが)、雲居の雁とその
恋の象徴なのである。

頻繁に藤の花が登場しその淡い紫の色と匂いが話(文面)から漂い流れてくるようである。作者紫式部は文中歌にふんだんに藤の花を登場させ、読者に印象付けようと躍起になっている。優雅な心性というべきである。

滞りなく雲居の雁との婚姻を成し遂げ、晴れ晴れとした気持ちで幸せな結婚生活を送る夕霧の中將であった。

紫の上の慟哭の心情

物語は大筋で二つに分かれていて、明石の君の娘が東宮へ入内(じゅだい)する模様が描かれる。

この姫君は、源氏の実質的な北の方というべき紫の上が幼い頃から養育していて、自分の子供同然にそだてていたのであるが、ここでついに手放さなくてはならないときがくる。

しかし紫の上は取り乱すことが無く、入内の儀式に際して母親の証の君を同席させるべきであると主張して、夫の源氏を感動させ、まだ合ったことのない明石の君の感涙を誘うのである。

作者はあえて紫の上の心情を明かさず、事の推移を淡々と述べることに意を注いでいる。

そのことによって、源氏との間に子供を持たない紫の上の心情を言葉以上に際立たせている。心憎いばかりの文章技術といえよう。

物語は冷泉帝が源氏の館である六条院に行幸し、先の天皇朱雀院も列席して大宴会が催されるシーンで終わる。

この巻をもって第一部の終わりということであるから、第二部は違った語り口

からの導入になると思われる。大いに期待したい。

背筋が凍る話(元空将補本村久郎氏の講演)

<< 作成日時 : 2014/09/06 21:19 >>

2014 年 9 月 6 日



「ブルーエンジェルス」の隊長

先月 31 日の日曜日、東久留米市の創美流華道会館である講演が行われた。

創美流華道の家元渡邊華靖氏が会長を務める自衛隊父兄会(東久留米市・東大和市・小平市合同)で行われた本村氏の「中国の航空宇宙戦力の動向」と題する講演である。

この自衛隊父兄会に本村氏を紹介したのはかく云う私である。

神田の日本イベントプロデュース協会主催のイベントで、本村氏による日本航空ショーの花形「ブルーエンジェルス」の紹介と活動を兼ねた講演に出向き、氏の話に大いなる興味と感動を抱き心にずっと留めていた。

氏は、防大卒業後事ジェット戦闘機のパイロットになり、確かな操縦技術と統率力が評価され「ブルーエンジェルス」の隊長を務めた、日本の空の守り神の一人なのである。

イベントプロデュース協会での私の剣術の講座にも脚を運んで下さり、名刺を交換するなどして気になる人の一人となった。普段の付き合いは無かったが、私が東久留米の自衛隊普及会に出席して自衛隊の佐官クラスの人たちの講演を聴いているうちに、ふと本村さんのことが思い出され、ある月例会に彼に来てもらい家元に紹介してこの日の講演となった次第である。



太平洋の西が中国東が米国

前置きが長くなってしまったが本題に移ろう。

講演の要旨は、GNP 世界第二の超大国となった中国が、その経済力をフルに用いて航空戦力、ミサイル、空母、衛星打ち上げ、サイバー部隊などを恐ろしい速度で充実させていることを数字や具体例を挙げて紹介することである。

本村氏は数十年前から中国の軍事力(特に得意とする航空戦力)について研究と資料の収集を心掛けてこられたとのことで、数々の最新鋭戦闘機や建造中の空母などの写真を紹介しながらの解説は、機密事項に触れる直前の資料と思われるほど詳細で説得力があった。

かつての軍国日本のように、これから近々に戦争が始まることを予想して軍拡を

急いでいるといったふうにしか思われぬ。

昨年のものであったか、国家主席に就任したばかりの習近平氏がアメリカのオバマ大統領と会談した折、太平洋を二つに分けて西側を中国、東側をアメリカというふうにシェアすればどうか、と提案したことが新聞紙上を賑わせたことを憶えておられる方の多いと思う。

荒唐無稽な発想としか思われず、「いったい何を考えているんだろう、この人は」といった比較的冷静な論調で推移しそれ以降あまり問題になることがなかった。

宇宙が戦争の主戦場

しかし、この発言が意味していることを考えてみると、太平洋西側というと、韓国はもとより南西アジアの国々、及び日本が含まれていることに気付く。発言の裏には、これらの国々の占拠・中国領への編入が想定されているのである。

本村氏はある一つの地図をパソコンの拡大画面に出して説明する。

太平洋の真中に線が引かれ、ニュージーランド、オーストラリア、グアムを含め、大陸の海側にあるアジアの諸国すべてが赤い色に染められている。

この地図は中国によって作成されたものであると講師は説明し、日本は関東以北がグレイ以南が赤となっている。なぜ色分けされているかというと、日本を占領したとき、関東以北は地震などの災害が多いので中国人を余り住まわせないようにして、以南は比較的安全であるので、中国人の移住を積極的に奨めるという意味だそうである。まさに、ヒトラー、スターリンの妄想を遥かに超えた狂気の沙汰としか言いようがない。

ステルス機能を備えた最新鋭ジェット戦闘機、核弾頭を掲載した ICBM(大陸間弾道弾)の量産はもとより、国内のあらゆる場所に建設予定の軍用空港の充実、

そうして衛星網の拡充。

現代中国は特に宇宙への関心を強めており、宇宙からアメリカと世界を攻撃するシステムを開発中とのことである。

近く月面の有人探査を行う計画が発表されたが、本村氏によるとそのすべての計画は軍事目的であるとのことである。

また 2000 人といわれるサイバー部隊への傾注は度を越しており、最新鋭ジェット戦闘機、ミサイル、空母などは、サイバー部隊によって世界各国の国防機密情報から盗み出して、堂々とコピー量産しているとのことである。



三、四百万の人民の死は想定内

日本などは問題ではなくアメリカこそ仮想敵国なのである。核戦争になっても自国の三、四百万の人民の犠牲は想定済みで(共産党幹部は、核シェルターに潜んで指令を出すだけである)、そのかわりアメリカも中枢都市の壊滅は免れないとしている。

人口の多い中国では三、四百万の犠牲など痛くも痒くもないのである。この雄大な(?)構想を踏まえると、新たな防空識別圏の設置はごく初期の第一歩であり、尖閣・南西諸島の占領、沖縄の接收、次は日本本国と段階がすでに設定されているのであるから、尖閣諸島周辺の領海侵犯に対して日本側がいくら抗議しようと抵抗しようと、彼らが立ち退くということは考えられない。それどころかますます規模を大きくしてくるのは必定である。

そうなると戦争ということになるが、どのような事態に立ち入ろうとも日本が戦争に突入することはないと踏んでいるのであり、眼を覆う挑発はエスカレートするばかりである。

中国の強気は、世界に冠たる経済成長率の増大を背景とするが、いつまでも成長が続くとは限らない。すでに中国のバブル崩壊が取り沙汰される昨今である。

中国の経済成長率が止まりあるいは低下し、経済が成り立たなくなって計画の通りに軍備への支出が大幅に減るということが起こるであろうか？

しかし、中国共産党はそのメンツにかけて、人民へのサービス、資金と物的援助を大幅に減らしてまでして軍備に金を掛けることを止めることはないであろう。

共産党という硬直した組織が、財力の柔軟な運営を阻害するようにできているからである。そうすると、遠からず人民の大規模な反乱が発生し、共産党政権は崩壊

する。

その時起こる混乱と全世界に及ぼす影響は計り知れず予測すら立たない状況となる。現代中国の軍拡よりそのことの方が全世界に与える影響は大きいと私は考えるのである。

背筋がぞっとする夏の怪談話の第二弾は果たしてあるのだろうか？

講演終了後は階下での懇親会に移り大いに談笑。本村氏の戦闘機搭乗秘話を聞きたい気持ちもあったが、時間が足りず散会となった。



「御嶽山合宿」三回目

<< 作成日時 : 2014/10/15 00:05 >>

2014 年 10 月 14 日



鎌倉時代から続く山荘

御岳山の合宿は今回で三回目となる。鎌倉時代に始められたという宿坊御嶽山荘が定宿である。

10 月 11, 12, 13 日の三日間の合宿であるが、三日目頃には台風 19 号が関東に最接近するという報道が盛んになされていて合宿自体危ぶまれたのであるが、その時はその時と腹を固めて、80 本の巻き藁を車に乗せて青梅の御嶽に向かった。

参加者は、木下信也、高梨良二、後藤佑介、森下こうえん、それに私の 5 名。あと一名、私とほぼ同年齢の鶴見さんが激励を兼ねて一泊予定で宿にやってくること。

11 時過ぎ麓のケーブルカー駅に到着。山荘のご主人がバンで迎えに来て下さっていた。乗用車に積んだ藁をバンに移し替えるためである。

水に5日間ほど浸けた藁は十本一組で梱包したのであるが、一束で30キロ超はあり、一人で持ち運ぶのは大変である。それでもどうにかバンに積み込んで、一足先に山の中腹にある体育館に向かってもらった。私たちはケーブルカーで現場に向かう。

刀道大会に向けた稽古

宿には入らないで荷物・道具を持ったまま体育館に向かい、麓で買ってきた幕の内弁当をいただいて着替えを始める。

稽古に先だって正座の挨拶をするのは、御嶽山の主神である日本武尊及び福神の神々に対してである。全員頂上の神社の方角に向かって安全祈願の平伏。

いつも通りの刀道体操・気を整える気功術を行い、体捌き、木刀による素振り120本を行う。床にブルーシートを敷き、試斬の準備。

11月に刀道大会を控えているので各自出演する演目を重点に試斬稽古を行う。この日は規定刀法1と2、それに据物斬りを中心の稽古。

据物斬りというのは、刀道独自の刀法である体転を行わず、仮想敵である目の前の巻き藁を同じ位置で7段に斬り分けるというものである。しかも連続技で速く正確に斬るところが主眼で、優勝候補に近いところにいる若手の後藤が担当する。

この日彼は調子が良いと見えて、ほぼ完璧に据物斬りをこなしていた。本番でこの通りできれば、優勝はまず間違いない。しかし本番では独特のプレッシャーがかかる。それを乗り越えるためには古武道の基本である『平常心』が欠かせない。果たして自信をテコに彼は乗り越えることが出来るかどうか・・・



思い切りと決断が必要

規定刀法2に挑む木下は、業に組み込まれる右水平が上手くできず自信を無くしかけている。規定を外した稽古では右水平をこなしているのであるから、業の中で

のその部分に苦手意識があり、それが彼の思いきりと決断を鈍らせている。

規定1に取り組む高梨は自信をもってクリアしており、その調子で大会に臨めば三位以内は確実であろう。ただし彼はプレッシャーには弱いところがあり、慌てると突然頭の中が真っ白になってしまい、調子を狂わせてしまうので要注意である。

森下は試斬はまだ数回の経験しかない。段位も無段である。しかし素振りで十分に稽古を積んでおり試斬稽古を重ねていくと短期間で上手くなる素質を持っている。成長が楽しみである。

明日のメインとなる団体戦の稽古のためにこの日は30本をこなして終了。まだ三時になったばかりであるが、明日の英気を養うために早々に宿へかう。





盛り上がりのない宴会

皆が楽しみする夕食は 6 時からであるが、間に合うように到着するはずの鶴見さんが中々現れない。彼は文武両道塾の最初期のメンバーであるが、事情があって数か月で稽古を止めてしまった。しかしメンバーの意識は強烈で、一日だけでも合宿に参加したいということで一晩泊まりでやってくるのである。

30 分食事の時間をずらしてもらったがそれでも現れないので先に皆でいただくことにした。

そのうち彼がやってきて(すっかり暗くなっている)宴席に加わる。それにも拘らず、私の身体の調子が悪く酒があまり進まないのも盛り上がり欠ける。

ただ後藤が一人気を吐いて食欲旺盛で、私が一杯食べる間に三回もお替りしている。まだ 30 歳になったばかりの若さであるから当然といえば当然であるが。

木下高梨の二人は私に気兼ねしてか、去年は引きも切らず取り寄せていた熱燗も滞りがちで、早々と宴会を終了し部屋に引き上げるようになった。私はビールをコップに三、四杯、熱燗二合ほどしか飲んでいないのにどうにも体がだるく、部屋に帰るなり敷かれていた布団に潜り込んでしまった。例年の行事であったビール缶斬りなどの余興もなし。

三時間ほど眠り込んで目を覚ましたが、みんなの会話に加わることもなく寝たふりをして喧々諤々の議論を聴いているうちに再び眠りに落ちる。



御嶽の神々に感謝

翌朝台風情報に聞き耳を立てていたが、沖縄に上陸した台風 19 号のスピードがスローになり、関東を通過するのは合宿終了翌日辺りとなった。安心して終日の稽古に打ち込むことが出来た。

この日のメインはすでに述べたとおり団体戦の稽古である。団体戦は、先鋒、中堅、大将の三人一組になり、他の組と決められた型にのっとり試斬を行う。

先鋒高梨、中堅木下、大将が後藤である。先鋒、中堅は何とかクリアできるのがあるが、大将の後藤が水平二本斬りがどうしても出来ない。力の加減や刀が入る角度などいろいろ変えてやらせてみるが、一本目は確実に斬れるのだが、横に並んだ二本目を吹っ飛ばしてしまう。

何故斬れないのか彼にも私にも分からない。何十回も試みたけれど結局成果が出せなかったが残念である。この日、50 本の藁をことごとく細かく切り刻んで終了。

鶴見さんも初めて試斬を行い、夕方までに満足して帰って行った(半巻の藁を作るときにカッターで指を切るというアクシデントはあったが)。残った人たちはむろん全員怪我もなく一日を終え、御嶽山鎮守の神々に対し、お守りいただいた感謝の拝礼を行い宿に向かう。



来年は元気になって頑張るぞ

終了後後藤は何度も「斬れないまでもコツが掴めてきた」とつぶやいていた。本番でコツを発揮してくれれば言うことなしであるが、試行錯誤は続くとみなければならぬ。

夕食は、切り口の分析、上手くいかなかったときの反省などで盛り上がったが、二日目の夜も缶斬りの余興はなく、わずかに残った日本酒を舐めながら議論するに止まったようである。

私が早々と沈没したことが原因であることは明らかである。合宿の面白さは夕食後の盛んな議論余興であるが、いつもなら浴びるように酒を飲みながら盛り上げ役をやる私なのであるが、身体の不調が響いて早く寝てしまい盛り上がりの欠け

た合宿となってしまった。

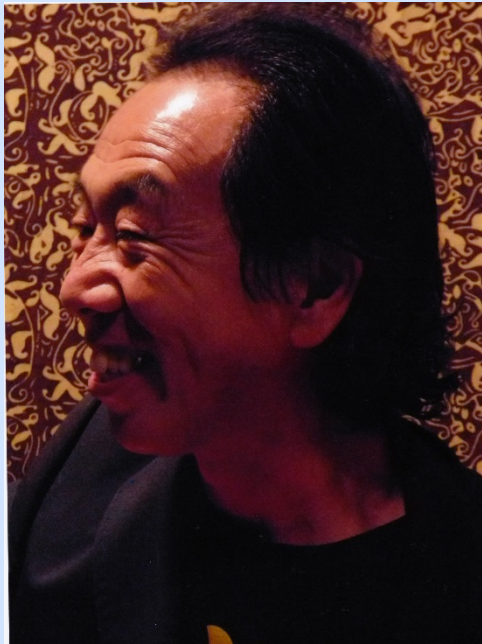
来年は一層倍元気になって大いに盛り上げたいものである。



TPC ライブ「フラメンコギター日野道生」

<< 作成日時 : 2014/10/28 11:23 >>

2014年10月27日



オリジナル曲「蒼い風」

久しぶりにフラメンコギターの名手日野道生さんに店(トーキョー・ポエット・カフェ略して TPC)で演奏してもらった。

彼にはこれまで三度ほど来てもらったが、すべてカンテ(歌)や打楽器といったパートナーを伴っての演奏であったが、今回は初めての単独での演奏である。

二年ほど前彼は最新の CD「蒼い風」を発売した時に、その記念ライブの一つとして行われ西荻のライブハウス「音や金時」の公演でスペシャルゲストとし

て私を招いて下さり、詩即興朗唱を二曲謳った。ウードの常味裕司さんが日野さんのパートナーとして招かれていた。

オリジナル曲「蒼い風」は日野さんの全てが詰め込まれたスピード度感のあるとても素晴らしい曲で、その演奏を聞いて感動し、いつか店でほかの曲とともに店で演奏してもらいたいと思っていたのである。







アンダルシアの赤い土

私の即興朗唱は二曲ともその場で彼が題を出したもので、最もスリリングで即興の原点でもあるものである。一つは「アンダルシア」もう一つは彼の新曲「蒼い風」そのままの題である。

スペインのアンダルシア地方は独創的な芸術家を輩出する風土のようで(私はスペインへ行ったことがない)、私が好きな詩人口ルカはもとより、偉大な画家ゴヤを生んだ地方でもある。

いったいスペインは独創的であると同時に特異な芸術家を数多く生み出している。画家のピカソ、ダリ、チェロのカザルス、建築家のガウディなどがそうである。

私は以前堀田善衛の大著『ゴヤ』をよんだことがあり、アンダルシア地方特有の赤い砂で覆われた大地について述べられた部分の記述が印象に残っており、朗唱の核心部分となった。

むろん主役はロルカである。ほとんど考えることなく言葉が声となった奔出し、最良の朗唱の一つとなったという思いがある。

名曲の至芸の演奏

さて、この日お招きした日野さんの演奏には「蒼い風」はなかったが、独特の砕けた語り口で演奏曲、またスペインについてさまざまなエピソードを披露しながら、ごく自然に曲に入ってゆくところなぞまさに名人芸と言って良いのである。

よく聴くタルレガの名曲「アルハンブラの思い出」などの至芸の演奏とともに、私がはじめて聞く半音階を主にした中東風の楽曲（彼のオリジナル？）は大変素晴らしいものであり、すっかり聞き入ってしまった。

私は今食道がんを患っていて間近の入院が予定されており、入院前に一曲という思いが沸き起こり、日野さんに頼んで第二部の冒頭で即興朗唱を相伴させてもらうことにした。

「音や金時」に招かてた時に謳った即興朗唱「アンダルシア」がテーマとして再浮上したのである。私は同じテーマで即興を謳うことはまずないが、このときばかりはそれ以上のテーマは思いつかず、迷わずやらせてもらうことにした。もちろん内容は同じではない。いま中東を中心に行われている戦争は全世界に衝撃を与えている。それが朗唱にも色濃く反映されることになる。



『巨人の影』

アンダルシアの赤い土が風にあおられ舞い上がってゆく。

みはるかす地平線の上に広がる澄み切った青空を、
鮮血の色で染め上げるまでに。

赤い砂嵐の背後に人型をした巨大な影が突如現れ。

地平線越しにゆっくりと動いてゆく。

天を突くその大男の風貌は凶暴で逞しく自信に満ちている。

大地を揺るがす足音は不思議に聞こえてこない。

ただ強風に舞い上がる赤い砂の遥か後方で、

地平線をまたぎ越すかのようにゆっくりと動いてゆくだけである。

何かの破滅を見届けるかのように、

あるいは破滅そのものに関わろうとでもするかのように。

どのように文明が新しい発明発見をもたらそうが。

人は集団で殺し合いをする本能を停止することがない。

地平をゆっくり動く巨人の姿は、

人の醜惡な本能が凝縮されたものかもしれない。

あるいはその本能を押し潰す得体の知れない重力かもしれない。

それでも人は生まれ成長し生きて死ぬ。

そうして得体の知れない重力にあらがって

人々に勇気と生き抜く力を与えてくれる同類が現れる。

おおフェデリコ・ガルシーア・ロルかよ！

あなたもそのような人の一人である。

自国の民をこよなく愛し歌に詠んだロルカは、

詩人であるという理由で官憲の手で殺害された。

まだ四十にも手の届かないその若さで。

詩人は常に精神の自由を求め、

ユートピアを夢想し、

抑圧されることを何よりも嫌う。

批判し、抗議し、怒り、戦うからではない。

存在そのものが権力にとって邪惡なのである。

それがロルカ殺害の理由である。

詩人は若くから死を予感していた。

彼は自らの詩の中で歌っている。

私が死んだらオリーブの木の下に愛用のギターと一緒に埋めてくれと。

まさに彼は小高い丘の上に立つ一本のオリーブの木の前に立たされ

銃で撃たれて死んだ。

自由は誰にとっても尊い。

しかし「自由を憎み、自由を操作し、自由を悪と考える人間も存在する。

そうして反目と憎み合いが生じる。

そうして戦いが始まる。

今度は大地に響き渡る巨人の足音が聞こえてくる。

ズシンズシンと大地が振動する。

赤い砂埃の彼方に見え隠れする地平線上を

ゴヤの巨人が鋭い目を光らせてゆっくりと動いてゆく。



写真撮影 佐伯領二



日時 平成26年12月13日(土曜日)

11時より 拝殿真剣四方祓奉納及び創美流華道家元献華之儀

13時と14時の二回 能楽堂奉納演武

場所 九段靖國神社拝殿及び能楽堂

奉納者 拝殿四方祓 佐土原台介

能楽堂演武 佐土原台介 木下信也 高梨良二 後藤佑介

連絡先 03-3303-1946又は090-1736-8381(佐土原)

拝殿での四方祓献華之義陪観をご希望される方は(玉串料一千円)、
当日10時までに参集殿受付までお申し出下さい。

大島龍著『二月の魚 オオカミの月』を読む

<< 作成日時 : 2014/11/16 12:38 >>

2014年11月15日



存在そのものがポエジー

木版画家大島龍が新しい本を出した。「詩集」と銘打っているわけではないが、間違いなく本格的な詩集である。満を持してのものであり意欲が漲っている。

普通の詩集と体裁がかなり異なるが、表出者の全存在を丸ごと前面に押し出して多面的に言葉を噴出させているということにおいて、むしろ本格的な詩集というべきである。

彼は行分け文に交えて普通でいう散文をトンと置く。彼にとって散文と詩文の区別は本質的に存在しない。なぜならポエジーのあり方が違うだけなのであるから、区別する方がおかしいのである。

これは誰にでも出来ることではない。大島龍だからできることなのである。存在そのものがポエジーであるような生き方ができる人間だけが一切の区別から超越する。

言葉がある一行から別の一行へ次元を変えて飛躍するように、彼の肉体がある場所から別の場所へ移動することによって新しい場所が創出され、それがポエジーとなる。

彼は常に移動し一つ所へ留まらない。しかし放浪者ではなく漂泊者でもない。彼は北海道石狩川河口付近にアトリエを構えており、帰りたい時にはいつでも帰ることが出来る。

また旅人ということもできないであろう。旅人には旅の期間があるが、基本的に彼の「旅行」には期限というものがない。移動した場所が生活の場なのであり、元の場所へ帰還するための場所ではないからである。

強引な話法、眉唾の体験談

会話すると分かるが彼はかなりの理屈屋である。かなりというよりはあきれてモノが言えないほど自分自身を押し通す。「それは違う」「おかしい」「ありえない」「とんでもない」といった異論に対して、執拗に自論を述べ立てる。

自分が語ることすべてが正しく正確で的を得たものであるかのごとく語り、他人の異論に耳を貸すことがないのである。リュウには相手の異論に対して「かもしれない」「その方が正しい」あるいは承諾の沈黙は存在しないのである。

結局は顔をしかめながらもこちらが沈黙するか話題を変えるしかない。その結果かれはしたり顔をしたり勝ち誇ったりすることはない。握手の手を差し出すことはあ

るが、それは言葉が成立したことへの挨拶であり次の話題への移行の端緒なのだ。

こうしたことは前から分かっていたわけではない。この本を読むことによって腑に落ちたようなところがある。リュウは30年来の親友であるが、私は彼の強引な話法、眉つばの体験談にいつも少しづつ違和感と不信感を抱いてきたことを告白しなければならない。それが彼一流の個性なのだと自らに言い聞かせ自分を納得させてきた。

しかしこの本を読んで、私が彼の個性と思い込むことによって納得させようとしたある種のいかがわしさ、強引さ、眉唾の体験談が、彼にとって嘘偽りのない真実であり事実であることを納得することができたのである。このことは彼と私の関係において劇的というべき質の転換であり発見である！

彼が在るといえば在るのでありかれこれしかじかであるといえばかれこれしかじかなのである。たとえ評価が定まった歴史的事実や年号や人物名が明らかに「違う」と思われても、彼は独特の話法によって自説へ巧みに誘導する。もし私がアホくさいといって取り合うことを止めればそのとき私は負けたのである。つまり彼の自説が正しいことを認めたことになるのである。

時間に関する重要な発見

そういう敗北の仕方は偽りの関係であるといわれるかもしれない。だが沈黙すれば認めたことになることはいうまでもない。偽りの関係ではなく私のアプローチの仕方が間違っていたのである。

何はともあれ、この本を読み進める読者に私が個人の意見として述べてるような違和感を抱くことはないはずである。散文と詩文がスムーズにマッチし独特の語り

口を形成し、途中で挟まれる彼の版画の個展歴すらがポエジーと化している。

それだけではない。彼は時間に関して実に重要な「発見」をしている。時間に関して緻密な展開と考察を積み重ねてきた西洋哲学がついに見落としてきた(つまり考察や思索では決して見出すことができない)、彼のいう「湛えられた時間」「一瞬であり永遠である時間」のことである。「ひとに与えられた時間」と述べているように(いずれも214頁)、これは誰もが持っている「時間」であるが、体験と直感によってしか見出されないものである。

それは時間であって時間ではなく、存在すらも許されることがない。ある種の素粒子のように存在する一瞬あったように思われたときはすでに消滅している。しかしそれは自分の感覚の中に濃密にたゆたっている。

一瞬であり永遠でもある時間

私はこの箇所を読んだときに電撃のように脳裏を過るものがあつた。自分もそれを体験したという記憶・感覚・震えである。実は私はその感覚を自分の詩集『メガロポリス狂想』(1995年刊 矢立出版)収録の詩「そのとき」の中に次のように書いている。

「時間はどこでつなぎあわされるのだろう

一秒と一秒 時と時の間の

同極の磁石のような断絶が

場と場は何によってむすびつくのだろう

一点と一点 境と境の間の

次元を異にした隔たりが？」

私の場合はリュウのように明らかな体験から招来されたものではない。それは直感というやつだ。突然感覚として体験される言葉の閃光なのである。それは未来でも過去でもなく過去と未来を交錯する現在という時間でもない。明らかに時間なのであるが、時間を超越しており一瞬であると同時に永遠である。

そのことを体験(感覚)することによって、既成の時間から解き放たれ、時間をたゆたい、意識も身体も自由になることができる。

事実や物体が固有の意味から解き放たれ、固有の意味を飲み込み、固有の意味に溶け込んで渾然一体となり、大宇宙と同化するその瞬間なのである。そのことを完全に理解している大島龍は、従って次のよう書く事ができたのである。

「オオカミを記号化する『オオカミの旅』は霊性としての精神、生態系としての哲学、environment としての自然環境、そして時間の抽象性を内在して記号となった。記号の呪詛が解き放たれ、オオカミは『空』『雲』『森』『波』と地球の記憶の時間となった。『Resonance』により『愛』『勇気』『冬の月』などのオオカミ達のも概念、神話などのストーリー性からすこし自由になった。(215頁)」

たどり着いた『青』の世界

彼はある時期(もちろん今も)オオカミに魅せられ、オオカミを板に掘り、オオカミを求めて世界中を放浪してきた。彼をよく知る人たちは彼のことを、オオカミの版画家、遠吠えをする詩人、オオカミを求めてさまよう旅人というふうにいる。

ある意味では正しいが、ある意味では正しくない。なぜなら、いま引用したよう

に、オオカミは『記号』となったからである。オオカミは地球であり、宇宙であり、また自分自身でもある。

「かのオオカミの胃袋のなかに 丸呑みされた我らが夢
丸呑みされた我らが魂 ゆっくり溶けていくがいい(190頁)」

リュウはオオカミを追求することによって、まさにオオカミの居場所ともいうべき『青』の世界へたどり着いた。そこではオオカミの具体的な姿はもはや必要ないのである。すべてが『青』のなかに溶け込み、『青』のなかに内在し、『青』そのものになった。

これからまた大島龍の新しい物語が始まる予感がある。

2014年10月25日

初版第一刷発行 饗文社 ¥2,200

『京ことば源氏物語』全五十四帖隔月連続語り第三十三回

<< 作成日時 : 2014/12/16 17:49 >>

2014年12月15日(日)



二つの義務のバッティング

昨日『源氏物語』収中一大長編である第三十四帖「若菜上」第二回目の語りの会があった。

一回目は合宿と重なって参加することができずまことに残念という他ない。昨日は、文武両道塾生共々靖国神社奉納演武に懸かりっきりで、その翌日ということで身体もクタクタであったが、語りの会を二回続けて休むことは許されない。

会に参加することは義務であると思っている。この日は私が役員を務める全日本刀道連盟の納会であり、この会も出席は義務であるのだが、体調不良ということで欠席の連絡をしておいた。

仮病などではない。私は食道がんを患っていて、長期入院の結果アルコールをほとんど受け付けなくなっており、忘年会に出るのが気が重かったのである。

トレードマークの髭もなくツルツル頭を毛糸の帽子で隠して会場に赴くのは気が引けたが、そんなことは言っておられない。

現に会場で旧知の女性を見かけたので挨拶したところ、怪訝な顔をされてしまった。いかかわしそうな奴が入ってきたと思った常連客もいたであろうが、いつものように作務衣を着て出かけたので、ああ彼奴かと納得された向きもあったかもしれない。

開始直前に会場へ入ったので席が一番前しか空いておらず、語り部に姿を晒すのが恥ずかしかったのであるが(一応語り部山下さんにはこれこれ云々の変わり果てた姿で現れることをメールで伝えてはおいた)、まな板の鯉と決め込むことにした。



奥に秘めた女心

冒頭は「若菜上」一回目の簡単なおさらいと本篇で語る内容の紹介である。先の帝朱雀院から押し付けられることになった厄介な出来事に懊悩する源氏の姿が点描される。それ以上に源氏最愛の連れ合い紫の上の心理の綾が細かく推理され立場の切なさが解説される。

どういう出来事かという、出家を間近に控えた先の帝朱雀院の愛娘(内親王)女三の宮が源氏に嫁ぐことになったのである。女三宮の行く末を案じる朱雀院が源氏に白羽の矢を立てたからであり、助平心を起こした源氏の惑える魂が OK してしまったことによってそのことは起こる。

しかし、相手はまだ一四歳であり、宮殿で何不自由なく育った無邪気で世間知らずの子供なのである。子供とはいえ一四歳になればとつくに初潮を迎えた「女」であることは自明である。

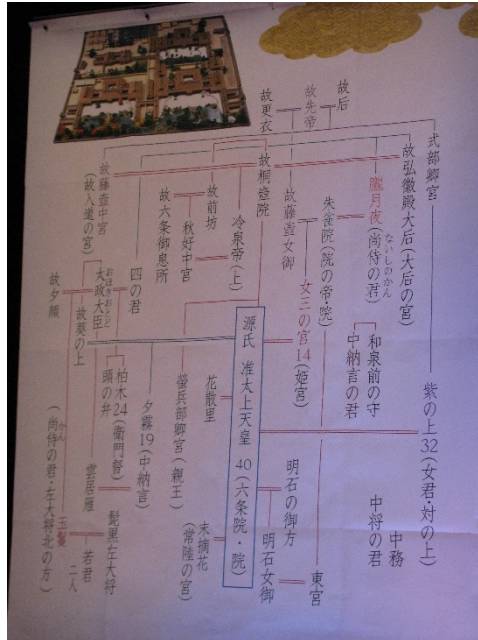
いくら院のたつての願いとはいえ、実質上の妻である紫の上を差し置いて正妻を迎えるというのであるから、紫の上の心中は穏やかではない。

源氏もそのことは重々分かっていて、
「本当に愛しているのはあなたなのだから気にしないで欲しい。しかし相手の対面を傷つけることがないように充分にお世話はするつもり」といった弁解にはならない弁解をする。

紫の上は心中を包み隠して、
「むしろあちらの方で私を目障りに思ったりしないかしら。私とも無縁な方ではないので(女三宮の母は紫の上の父の叔母)親しくしてもらえないものではないでしょうか」とへりくだって返答する。

源氏は気を良くして、世間の噂を気にしてつまらない嫉妬をしたりしないように、

本心とは逆の事を言ってしまう奥に秘めた女心に深く思いを馳せることもなく。



浮気がバレた後でカミさんに、

「本気ではないのなら別にとやかく言う積りはありません」

などと言われようものなら男は有頂天になって、

「ほんと？ さすが俺が選んだ女房だけのことはある、ありがとう！」

などとほざいて話はチャラになったと思い込んでしまう。

しかし女が本気で許すはずはない。

言葉には出さなくても夫の裏切りは深く心の傷となって残り続け、やがて何かのきっかけで噴水が吹き出るように表に出てくるのである。

筆者たる私がそういう経験をしたからということでは決してない。長年生きてきた経験による想像である。

またも燃え上がる浮気心

源氏は紫の上を上手く丸め込んだとは思っていない。こんな美しくて身も心もある最愛の人が側に居るのに、いくら院のたつての願いとはいえ、あの無邪気なだけで面白味のない子供のような姫宮をどうして迎え入れるなんてことをしたのだろう、と反省して思い悩むのであるが、後の祭りである。

その反省の思いなどどこ吹く風と言わんばかりに、出家した朱雀院の最愛の女御であった朧月夜の君のことを思い起こし、ムラムラと浮気心を起こしてしまう。

源氏が若かりしころ、この朧月夜の君とことを起こし須磨へ流されるきっかけとなるのであるが、彼女のことがどうしても忘れられないのである。

今は話題にすら登らない赤鼻の末摘花の病氣見舞いと称して、源氏は入念に香を焚きしめいそいそと出かけてゆく。

紫の上は源氏の落ち着かない様子を不審に思うが、朝帰りをしてきた源氏の寝乱れた様子を見て事の次第を悟る。

源氏は結局のところ昨夜の顛末をすべて紫の上に話してしまう。

ひた隠しにする方が深刻

この件に関して最初の解説のときに語り部は、こういう男性の心理はどういうものなのでしょうね？と疑問を投げかけられたのであるが、先に述べたことが一つの回答となるかもしれない。

つまり、妻が許す素振りを見せると、男は問題解決と決め込んで気持ちを放下してしまう。

あつけからんとすべてを話すくらいだからそんな大した問題ではない、むしろひた隠しにする方が深刻なことなのですよ、といった心理が働いているとみてよい。

とはいへ、当然紫の上が納得するはずもない。

ふたりの間にはよそよそしいすきま風が吹く。他に頼るものとなない紫の上の心情はいかほどのものであったか……

作者紫式部は、四十歳になってもあの浮気性で手の早い源氏の本領を、読者に思い起こさせようとする。

この人はまだまだお盛んで悟り済ます段階ではないですよ、と物語の筋に変化を与え面白くさせるのである。

読者は固唾を飲んで先へとページを繰るという仕掛けである。物語作者としての才能が遺憾なく発揮される場面である。

打ち上げの席での出会い

さて、物語はこれからも続きます、次回のお楽しみということで終了。

地下の打ち上げの席へ移動。私がこの会を紹介した知り合いのI氏が見えていて共に打ち上げの席へ付いた。

早々と出されたワインを口に含んでいるうちに語り部山下さんが姿を現し、全員拍手で迎えた。

私の横の空いている席に座った山下さんは、病気のことを大層心配して下さり、美しい顔に翳りを湛えて顔を覗き込むようにして話すその表情に、私はタジタジとなりつつもその優しさに感激もひとしおであった。

宴もたけなわになるうち、私の右隣りに席を占めていた年配の女性がバッグから分厚い写真の束を取り出してきて、自分の母が描いた源氏物語絵図の一部ですとおっしゃる。

杉板や羽子板、文箱などにそれは描かれていて、実に精巧で素晴らしいものであった。紛れもなくプロの仕事である。

実物はすべて流失していて、写真しか残っていないとのこと。

私はすぐさま持参したコンパクトカメラを取り出してきて、I氏に頼んで接写で撮って貰った。安物のカメラなので鮮明に写し取られたとは言い難いが、その精緻で優雅な筆使いの一端を見てもらうことはできると思う。

許可を得た上でここにその一部を紹介させていただくことにする(女性は児玉もえみさん、作者は御母堂の故富家保江さん)。







文武両道塾第二回『靖国神社奉納演武』

<< 作成日時 : 2014/12/20 22:52 >>

2014年12月19日



真剣による四方祓

さる13日、文武両道塾『靖国神社奉納演武』が举行された。創美流華道『献華の儀』に添って行われたものある。

11時より拝殿において真剣による四方祓が佐土原によって行われ、多数の陪観者に見守られて無事終了した後、本殿に登って櫛を奉納しての参拝。本殿正面に巨大な鏡が安置されていることに驚いた。

昼食後、一時より能楽堂において奉納演武披露。野外での演武には理想的な晴天に恵まれ、見物客も寒さに震えないで済んだ。

まずは全員舞台に揃って神社に祀られた英霊に対する挨拶から始める。
「祖国日本に殉じられた240万余柱の神霊に対し奉り、拝礼！」の私の声で、着座した全員が5秒間平伏。続いて刀礼を行い、最初の座り居合の型演武から始める。

私がマイクを取って解説しながら進行表に沿って次々に演武・試斬を披露。一回目の所要時間50分。二回目は二時十分より開始。

終了後番外編と称して、畳表二枚を巻いた太巻藁を力のある若手に試斬してもらった。

風、波、月三部の実戦刀法型

今回の演武は、前回とは少し進化して、多敵を相手の実戦刀法型を演じかつ試斬してもらったことに特徴がある。

ほとんどの剣術流派は一对一の技の習得に主流を置くが、刀道では多数の敵を相手とした技が多い。

特に私たち文武両道塾では、実戦刀法としての多敵に対する技の研究を行い、幾つかの独自の技を考案して披露した。

文武両道塾制定実戦刀法型は、風、波、月の部の三つのタイプに分け、それぞれ四本ずつの術技がある。

波の部には二刀流の型が一本、月の部では四人に囲まれた場合に対処する方法が組み込まれている。

その全てを披露するわけにはいかないから、各一本ずつを紹介することにした。写真にキャプションを入れて型の種類を紹介することにした。



木下、高梨、後藤三人の座り居合の型



高梨、後藤両名による10本組太刀のうち10本目





同じく木下、後藤による文武両道塾独自の相対組太刀



座り居合の試斬一本目



木下、高梨による相対試斬。撃ち掛かってきた相手を水平胴斬り



木下、後藤による相対試斬。二人が同時に水平斬り



実戦刀法型月の部月輪。四人の敵の最後の敵を左水平斬り



実戦刀法型風の部番外編疾風。右から撃ち掛かってきた敵を右逆袈裟



最後の刀礼(立礼)とメンバー紹介





番外編。畳表二枚巻き斬り



写真撮影 佐伯領二氏

2014年12月24日



予想もしなかった内容との出会い

久しぶりに図書館へ行って書棚を眺めているうちに、久坂部羊の新著(といっても2013年刊)が目についたので躊躇なく借りて帰った。

私は久坂部のファンで、以前に出版された本にはほとんど目を通している。『無痛』『まず石を投げよ』『神の手上下』『第五番』などである。この作家は元々は阪大出の医師で現役だとのことである。

小説執筆は副業といってもよいだろう。医師としての豊富な経験と知識を活かした医療小説は、新鮮な感動と驚きをもたらしてくれる。

特に8年ほど前に書かれた『無痛』という小説は、痛覚のない凶悪な医療従事者を描いていて、興奮しながら読み終えた記憶がある。

『第五番』辺りから図書館の書棚に新刊を見つけることができず、諦めかけていた矢先だけに、表題の本を見つけたときは飛び上がる(大袈裟?)思いであった。

家へ持ち帰って、何はさて置いてもと読み始めたのであるが、驚いたことに内容が「がん」と真っ正面から取り組んだ小説であったことである。

「驚いた」というのは、私自身二月ほど前にかなり進行した食道がんを宣告され、治療の真っ最中であったからである。まさに出会いといって良い。

早期がんなのに転移

物語の粗筋は、印刷会社に務める52歳の会社員仲本が、会社の検診で早期の胃がんが発見され、病巣の除去手術を受けた。それだけならなんの問題もないが、術後他の複数の臓器に転移していることがみつかったのである。

お決まりの抗がん剤の投与を受けるが、激しい副作用に苦しむ割には病巣の縮小は見られず、ついに抗がん剤治療の限界まで来てしまう。

激しい副作用のためすっかり衰弱してしまった仲本に対して医師は、これ以上の治療はむしろ命を縮めるだけだと判断し、次のように患者に告げる。

「残念ですが、余命はおそらく三ヶ月くらいでしょう。あとは好きなことをして、時間を有意義に使ってください」。仲本は余りにもストレートで配慮に欠けた医師の言葉に反発し、病室を飛び出して行ってしまう。

早期の胃がんと診断され、手術によって完治は間違いないはずであるのに、肝臓や腹膜に転移するという事態に納得できない仲本は、憤りを抱えつつ必死になって他の病院や治療方法にすがろうとする。

その過程でがん治療の現状と実態が明らかにされていくという構成になっている。

「免疫療法」とう夢の治療方法

すでに一回目の抗がん剤の治療を受け、強烈な副作用を体験した私としては納得する部分が多く、また患者を実験台にしようとする自分本位の医師の実態や、免疫療法などの新しい治療方法に関する紹介など参考になる記述に満ちていて、一時も本を手放すことなく約300ページを半日で読み終えた。

特に免疫療法という新治療法は、手術をしなくてもがんが治るといのがうたい文句で、まさに夢の治療方法なのである。

がんの項目でインターネットを検索してみると、まっ先にその治療を手がけるクリニックが列挙されている。

治療の骨子は、免疫細胞を増殖させる力のある NK 細胞を患者から取り出して培養し、それを注射によって元の体に戻すというものである。

それを四回繰り返して一セットとする。ただし保険が利かないので一回の治療が二十万も三十万も掛かる。クリニックによって金額に多少の違いがあるようであるが、金持ちにとってはまさに朗報であろう。

新治療法で完治は可能か？

私は貧乏人であるが、がん治療の費用を相当程度負担してくれる保険に入っていたので、あるいは試してみる価値があるかもしれないと幾ばくかの期待を抱いたのは事実である。

私は現在順天堂医院の食道・胃科で面倒を見てもらっているが、診察時に免疫療法のことを担当医に訊いてみた。

順天堂医院ではその療法を採用していない。全国屈指の最新医療を誇るその病院で採用していないということは、治療法がまだ確立していないことを意味する。

秀才タイプの優しそうな顔つきの医師であるが、彼は事も無げに言っただけのことであった。

「たしかに免疫療法について質問してくる患者さんは相当数いますね。もしどうしてもそちらを試してみたいというのなら、来月の入院手続きに見えた折に言ってくれば、そういうところを紹介しますよ。これまで二人ばかり紹介しました」

「完治されたのですか？」と尋ねると、

「数ヵ月後に二人とも亡くなりました」と淡々と答える。

二の言葉を私は継げない。

予定通り正月早々順天堂に再入院することを確認したのは言うまでもない。

小説の主人公仲本は藁にでもすがるように飛びついた免疫療法であったが、完治するどころか、病巣は拡大し悪化の一途を辿っていることが分かり絶望的な気持ちになる。

待合室のベンチで隣り合わせになった老人は顔色も艶々していて、経過は良好で完治寸前であるということを喋る場面があり、著者は免疫療法に対してある程度の評価はしていることが分かる。こういうシーンが無いと、免疫療法では治らないというイメージを読者に与えてしまうからであろう。

抗がん剤治療の功罪

著者が全編を通して言おうとしていることは、抗がん剤治療ががんを治すという誤った認識が広まっていることに対する注意喚起である。

病巣を縮小させることはできても消滅させることはできない、とほぼ断定している。早期に発見して手術で病巣を完全に取り除くしか方法はない。

それでも早期がんであるはずの仲本のように転移することがある。がんと転移は一体であり、手術は成功しても後に転移があることは前提なのである。

もう一つ、これでもかこれでもかと抗がん剤を使って、副作用で身体を消耗させることは命を縮めることに繋がり、ある程度(どの程度?)治療した後は放っておくほうが延命につながるとも主張している。

ある統計によると、患者に最期まで徹底して治療して欲しいか、というアンケートでは8割の人がそうして欲しいと答えたのに対して、医師に対する同様の質問では、その逆で8割がそうして欲しくないと答えた、という結果を著者は報告している。

残された余命の濃密さを思う

現代医学でもってしても、がんはまだまだ不治の病のカテゴリーに属している。

さて私はどのような対処の仕方をすべきなのだろうか? 再度の抗がん剤投与とそのあとに続く手術は避けられまい。

まだ52歳という仲本とは違って、私はもう73年間も生きた。それで十分ではないかと自らに言い聞かせようとしている。

むろんやり残したことこれからやりたいことは山ほどあるが、それは生への執着と同義であり、執着を断てば、所詮は自分がこれまで生きてきたことの総量こそが未来を含めた全てであることを悟るのである。

そうしたペシミズムは自分のことしか考えないエゴイストの言い分で、何としてでもがんと闘射抜いて克服してみせる、と言い張ることが後に残される奥さんや剣術

の弟子たちに対する配慮であり、義務であり、本来のあるべき態度なのではないかとなる友人もいる。

そのとおりかもしれないが、気休めを言っただけを見栄を張るより、きっぱりと正直な気持ちを妻や弟子たちに伝えて、私の気持ちを納得してもらえない。

余命が何ヶ月か何年になるか予断を許さないが、その方が残された人生と濃密に付き合えるような気がしてならない。

最後に、小説の主人公である仲本の運命に言及しておく、紆余曲折を経た後、包容力のある医師や看護師に恵まれたホスピスで、安らかに生を終えるという結末になっている。

2015年2月7日



気力に任せた詩画の完成

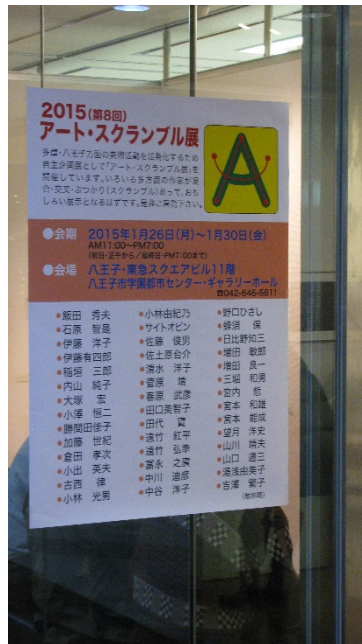
食道がんを患い入退院を繰り返しているうちに、ブログの記事を書く余裕を失っていた。気力を奮い起こさなければならない。

アートスクランブル展というのは、八王子にお住まいの画家春原武彦氏が主催する絵画グループ展で、毎年 JR 八王子駅前の東急スクエアビルのワンフロアを借り切って開催されている。

友人の春原さんの奨めで今回初めて出展したのである。

数年前の三狼展で初めて試みたように、水彩で描いたイメージ画の上に筆ペンで自分の詩の抜粋を書き連ねるというものである。詩画の下には、和紙の巻紙に抜粋詩の全文を筆書きして展示している。

全部で三点であるが、これらの作品は、第一回目の抗がん剤の治療を終え退院して数日後に完成させた。10キロ近く痩せていてかなりきつい作業であったが、体力の消耗を気力が優ったといえる。



40年間絵画制作とは無縁

詩は20数年前に手作りで三十冊ほど仕上げた詩集『万有の愛』から選んだ。「乗り物の愛」四篇の内からフネ、「人間の愛」からトモ、「現象の愛」からウゴメキの三篇である。

なぜそういう古い詩から選んだかというと、『万有の愛』全編を詩画にしたいという欲求がわだかまっていた、それが形になったのである。三狼展でも二点『万有の愛』を取り上げている。

私はもともと絵が好きで高校時代には美術部に在籍して油絵を描いていた。芸大の絵画科を目指し

たほどである。

ところが芸大に落ち日芸の映画科に進んでからは絵筆を取ることが皆無になり、爾来40年間絵筆を取る生活とは無縁に生きてきたのである。そうして数年前の三狼展で40年ぶりに絵というものと向き合った。

水彩であるが、極めて新鮮な気持ちで絵と向き合うことができ(ど素人の絵であることは一目瞭然であったにしても)、それなりに評判が良かったことに気を良くしたのであった。



あの友情のするどい槍で

佐土原 多介 詩集「万有の愛」より 抜粋

友は心臓のともも近くはある
ちまたに心を許した友はあはれは
釘板をもち歩くことは不要である
だから表切りにあるといふのなら
もともと星の友情はごはかつたのだ
ではあった



あの友情とは何だ。ただ
突如一方の事が引かれた
あの丘のようには断絶は拒絶は
友とはいつも迂回する道では金
心に想い描いてたとおりの幻想が
現実のものとはなってしまうとき

友はすでに目の前にいない
友はやがてどこかへ去るその後へ
新しい友の出現をこと用意して

友よ

私の言葉に関係性と読者の
詩はいつも錯綜を働き散らす
言葉が多くなればはるばる
竹の性質は曖昧なものだ
私が曖昧なのは詩だ
言葉そのものが曖昧なのだ



Dai 2014

詩集「万有の愛」(九段書局)

東物の愛 フネ

ドリフインの総綱する鞭

佐土原 多介

緑色花輝の涙の蕾を

舐め牙が切り裂き 進む

双眼鏡の中心から見え隠れする

美の小島 おお

時代性の名座

どこまでも呼ばれてはいないぞ

ドリフインの総綱する鞭

十度の傾斜を保った甲板で

海図を広げて精査して

宙点は描き込まれてはいない

涙の総綱に溺り込んだ

ベンガル虎がイライラモテヤメコ

の眼を除いては

さしづめ船は道路を西へ取り

目的地からケレツツツれながら進む

みつゝい航路が

おまんを連れて行く先は

反乱を燃え立たせる

百五十フルウのワッパが

ベッドの日没へ誘い込む

波色の皮膚をうたせながら

格を立て

頭蓋をまっさうにして

白紋の海図に描き込まれた

自らの思想の海域と

思想の珊瑚礁を

深き海に沈めた宙点は 見え

主帆柱に釘付けにされてた

平成六年十月九日記

佐土原 多介
アート・スクランブル展

詩集 万有の愛 (一九九九年刊)

人間の愛 トモ

あの友情のするどい槍で

佐土原台介

友情は憎悪と隣り合わせている
 とこんまで付き合えば
 憎しみに向う突き抜ける
 突破してしまふときに初めて
 友情の根の深さを思い感とされる
 此の友情 雲の友情 海の友情に
 わたしは憧れる
 漸とほった友情はら
 どこで酌み交わしても同じ味にする
 源々と刺し貫かれてみたい
 友情のするどい槍で
 わたしの気持ちに憎しみに
 取り変わるその前に
 不意に繰り返される出会と離別
 マッパに火が点く瞬間の
 闇に走る光さのように
 何となく純粋は湿りほのぼのう
 友が置き去れていったもので
 唯一至上の宝である
 友とはいつも迂回する道で出会う
 心に想い描いていた幻想が
 現実のものにはってしまふとき
 友はずで目の前に居ない
 友はやがてどこかへ去るその後へ
 新しい友の出現をそと用意して

平成六年十月九日 記

佐土原台介
 アート・スクランブル展

うごめく混沌のいいよとんだ舌

佐土原台介詩集 万有の愛より抜粋

うごめきは誕生のほのかに予感
 妊婦の腹の中で胎児がうごめき
 種子の埋った黒土はすがすがしい若
 芽に埋まられてうごめいている

燃やし尽くせ
 カビにおまわられた理髪店 音庫を
 もった燃やしちゃれ
 気配すがすがし感性の歌

岸へと休まふや 寄せる波
 海は荒れし 息も止めず
 水色にすぎた肺臓は
 次の世紀の生き物を育んでいる

おや 地面がぐさがさうごめいて
 きつと同じ場所を厭きあきったんだ
 地表をそとりにふりまわって潮がある
 おだやかな土地に降りたんだ
 アスファルトの厚さで化粧にうんざりした
 大地が深い溜息をつくだけで
 一つの都市が潰滅する



Dai 2014

詩集 万有の愛 (一九八九年刊)
現象の愛 ウゴキ
死の言い 漱んだ古
佐土原 台介

うごめきの内側で溢れかえっている
死の言い 漱んだ古
なにかゴトバをさすやると
ゴトバの洪水は大地を洗い流す
炎逆巻く風景の中
火葬場がうごめいている
静止しているものは何一つとしてはい
不動の岩盤に挟み込まれた全地も
その曲りもい成分が人間の
欲望の対象に替えらるのを待っている
おや 地面がさかきとうごめいている
さとう同じ場所にあるあきあきしたんだ
地表をさくくり引きすて 湖のある
おや かな土地に降りたんだ
アフリカの厚塗りの化粧にうごめいた
大地が深い溜息をつくだけで
ひとつの都市が潰滅する

うごめくものは軍隊である
ゴウゴウとうごめく潮回の下から
白い素足が見え始める
何と気急いエロティシズムだ
眩暈がしきりにうごめく見聞がする
ジラジラと滲み出てくる想像力
バツヤリと
生活から切り離された詩への欲望
不眠に寝たらしいもの朝
コソコソと夜を叩く音がする
ドアを開けてみるとまっさらな太陽
戸口に溜まってうごめいた光の軌跡が
わたしを導きだす

平成六年十二月九日記

佐土原 台介
アート・スクランブル展

退院したばかりで詩即興朗唱

その詩画を見た春原さんが「アートスクランブル展」への出展を勧めてくれたのである。

40名の作家が大小の自信作を出展しびつしりと壁面を埋めるさまは壮観であった。

絵画展は1月26日から五日間の会期が始まったが、私はその二日前に、第二回目の抗がん剤の治療で三週間の入院生活から帰宅したばかりであったが、脚腰は弱っていても身体が動かないわけではなかったので、オープニングに出席することにしたのである。

妻が経営する店で何度もライブ出演をしてくださったフォルクローレの標忠宏さんとフラメンコギターの日野道生さんが呼ばれていたこともある。

彼らの演奏を聴いているうちに詩即興朗唱をやってみたいという欲求が沸き起こり、主催者の春原さんに御願ひして、二人をバックに即興朗唱をやることになった。

退院二日後であり暴挙といっているが、やってみるといつもの通りの声が出て快適に朗唱を終えることができた。内容は、展示場が形成する磁場と宇宙との交感である。

標、日野両氏と固く握手。酒もビールをコップに二杯、日本酒の熱燗を三合ほどいただいた。

気力では人に負けないというのが私の生き方であり、身中を蝕むがんも精神の気力に従ってもらえない。 帰宅した時には十時半を回っていた。



『京ことば源氏物語』全五十四帖隔月連続語り第三十四回

<< 作成日時 : 2015/02/28 17:14

2015年2月27日



怠惰に安住する私

一ヶ月近くもブログをサボるということは今までになかったことであるが、ついに一ヶ月が経ってしまった。

時間はたっぷりあるのであるが、がん騒動で心慌ただしく虚脱した日々を送っているうちに、書くという仕事をしていないことに焦りを感じなくなってしまったのである。

それどころか普段はほとんどテレビを観なかった私であるのに、終日テレビを観て過ごすことも珍しくなく、そのことに憤りや疑問を感じようとしなかった。

人間ははっきりと目的意識と使命感を持って事に当たらないと、幾らでも怠惰になれるということである。そうしてやっとこの日が来た。

長編物語の進み具合

今回の語りは2月8日(日曜日)に行われた。

数日前から毎日放射線治療で御茶ノ水の病院へ通っていて、勤めていた頃の気忙わさはあったのであるが、これという副作用もまだ出てきてはおらず、余裕を持って出かけた次第である(数日後に襲いかかってきた猛烈な副作用に苦しめられることになるとは予想だにもせず)。

今回語りの対象となっている「若菜」は長編で上下に分かれており、いまだ上の三回目なのである。

先帝朱雀院の愛娘が源氏に嫁ぐという出来事から物語は始まり、実質的な北の方といえる紫の上の苦悩、源氏の愛人明石の君と源氏の間に生まれ姫君(東宮の女御)の入内と妊娠、性懲りも無い源氏の浮気(相手は朧月夜の君)などの物語があって、さらに話は佳境に向かって進んでゆく。

源氏四十歳のお祝い

源氏が朧月夜の君との密会の一部始終を紫の上に告白したことは前回で述べたが、それを聞かされる紫の上の心情は想像するも余りあるものがある。しかし紫の上は努めて明るく振舞って聞き流そうとする。そうするより他に彼女に残された道はない。

自分の行為を受け入れてもらったと錯覚した源氏は、昨夜の逢瀬は不十分であったからちゃんとした形でまた逢いたい、などと紫の上に呟く。空いた口が塞がらないというのはこういう事をいうのであろう。

紫の上はとにかく気分を変えて現状打破しなければならない。源氏の許可を得て北の方となった女三宮に会いに行き、仲良くやりましょうと友誼を結ぶ。

そうこうするうちに源氏の君が四十歳を迎え御賀の盛大なお祝いの儀が執り行われる。

皇室を除いて当時の最高権力者である源氏のお祝いには、上位の役職者はもちろんのこと宮中が空になってしまうほど、すべての殿上人が六条院の屋敷に集う盛大さである。

その様子を描写する作者の筆は具体的であり微に入り細を穿っており、豪華絢爛樽たる様子が鮮やかな視覚的イメージを伴って再現される。

作者は、心理描写だけではなくこうした視覚描写に対してもおさおさ抜かりはない。これらの描写によって千年後の読者である我々は、古の平安貴族のきらびやかな生活の一端を知ることができるのである。

作者紫式部による「もののあわれ」の体現

明石の女御が産気づいて実家ともいうべき六条院へ下がってきた。

そうして十五歳という余りにも若い出産に気をもむ周囲の心配をよそに、元気な男の子を出産するのである。周囲の喜びようはひと方ではない。東宮（皇太子）のお子を出産したということは、よほどのことがない限り二代後の天皇の位が約束されたということである。無事出産ということを超えて源氏一族が大喜びをするのは無理からぬことなのである。

何よりも喜んだのは、母親である明石の女御の育ての親である子供好きの紫の上である。彼女は生まれたばかりのお子を胸に搔き抱いて離そうとしない。彼女は格好の気晴らしの対象を見出したのである。

生まれたばかりのお子を胸に掻き抱いて喜々としてあやすその姿は、源氏にとっても途方も無く都合が良いことなのである。浮気を悲しんでめそめそする妻を見なくて済むし、何よりも、おおっぴらに朧月夜の君との密会を楽しむことが出来る。

ほくそ笑む源氏であるが、最愛の妻紫の上が悲しみを心の奥深く包み隠し、そのことを努めて表に出さないようにして行動していることに思い及ばないわけではない。

さらに胸にかき抱くお子が自分の本当の孫でない事情に思いを馳せ、紫の上の悔しさと哀しさを共有する想像力が欠けているはずもない。紫の上は源氏との間に子供が生まれないのである。

この設定こそが作者紫式部による「もののあわれ」の体現であり、人生と人間という存在に対する深い洞察力の表れにほかならない。

新しい生命と消えゆく人たちとの対比

さらにまた、作者は新しい生命の誕生と、役割を終えてこの世から去ってゆく者の対比を鮮やかに描き出す。

「去りゆく人」というのは外でもなく、新しく誕生したお子のひいお祖父ちゃんとお婆ちゃんの二人である。

この人たちは源氏が明石に流されたとき縁あって近付きになり、その娘明石の君と引き合わされて通じ生まれたのが明石の女御なのである。

ひ孫が産まれると聞いたお婆ちゃんは尼君となって京の六条院の娘の下にやってきて様子を見守る。源氏との出会いがなければ地方の一行政官に過ぎなかった二人は今や将来の帝の曾祖父なのである。

尼君はそれなりに歳を取り涙脆く呆けかけてもいる。自分たち一族がどういう経緯で今の境遇を得たのか、といったことを孫娘に語って聞かせる。

紫の上からやんごとなき源家の姫君として育て上げられた自分の出自を知らされて驚き、そうしたことを孫娘に打ち明ける老いた母尼君をたしなめる明石の君なのであった。

一方の父入道はかねてより仏道修行が念願であり、政務は部下に任せて山奥で修行に励んでいる。ひ孫の男子無事出産の報を聞いて修行に専念し遷化することを決意するのである。

土地財産を全て処分し二人の弟子を引き連れて人跡未踏の深山に籠り、誰にも知られずその地で生を終えるべく旅立つ。

その辺りの事情を切々と綴った文を娘明石の君に送る。生と死の鮮やかな対比であり、平安貴族のきらびやかな生活と地方に住む一個人の際立って孤独で厳然とした生き方の対比である。

語り部が、最後にこの手紙を原文で朗読した意味が分かるような気がするのである。

さて、チラシに差し込まれた語り部の文章によると、まもなく豪華客船飛鳥でオセアニアへの航海に旅立つという。お仕事とはいえ、さぞかし華やかで心躍る船旅であったことであろう。